足立区教育委員会指導力向上中核校

渕江小学校　外国語・外国語活動研究通信

第8号
令和3年１月

今年度8回目になる外国語・外国語活動研究の授業を奥田　健介教諭が行いました。今回は、教室で行われた授業を撮影したビデオを視聴しました。協議会では、やり取りの活動における中間指導等について活発な意見交流を行いました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成
～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者：5年2組　担任　奥田　健介　教諭
単元名：NEW HORIZON English Course 5　Unit 7　Welcome to Japan.
指導講評：文部科学省初等中等教育局視学官　直山　木綿子　先生

〈研究経過報告〉

本単元は、奥田先生の友人であるマリアさんの動画を見ることから始まった。動画は、コロナ感染拡大が明けたら、イタリアに住んでいる家族を日本に招待したいので、おすすめの季節と年中行事、食べ物を教えてほしいという内容である。この導入により、児童はマリアさんの家族に日本の素晴らしさを伝えたいと意欲をもった。単元の終わりには、マリアさんの家族に動画を撮ってマリアさんに見てもらうか、Zoom で伝える予定である。

担任一人で行う授業における新出表現との出会いを、より自然な出会いとしたく、「クイズ渕江小」として校内の先生と担任とのやり取りを動画に撮って見せることとした。

教師と児童のやり取りにおいて、児童が単語で答えた時に、教師がさりげなく正しい文で言い換えることを意識的に行うようにした。

また、今回特に力を入れたところは、やり取りにおける中間指導である。児童同士のやり取りの１回目と2回目の間に、わからなかったこと、困ったこと等を児童と一緒に考え、できるだけ既習事項を使った表現を見つけて全体で共有した。

＜学力定着推進課山口哲治指導主事より＞

6月にも奥田先生の授業を見たが、児童の取り組む姿の変容が見られた。

今回の授業について協議することで、奥田先生だけでなく、みんなで共有していきたい。

〈授業者自評〉

児童同士のやり取りを多くとったことで、伝え合う時間が多くなり、それにより、どう伝えればいいの？という疑問が生まれた。そこに、中間指導を入れることで、みんなで考え、みんなで共有することで主体的に活動することができた。また、表現が身に付いている児童が多いと感じられた。また、既習表現等をたくさん使って会話を広げることができ、とてもよかった。

〈研究協議〉 ◎良かった点　△課題点

◎マリアさんの動画を見せたり、「クイズ渕江小」で校内の先生の動画を見せたりして、児童の意欲を高める工夫をしているところがよかった。

◎児童同士でのやり取りがたくさんあったことで、会話の中で気付くことがあり、そこで浮かんだ疑問を解決したい気持ちが出てきた。意欲的に取り組めていた。

△マリアさんからの手紙を聞き取る場面では、手紙を画面に映す必要はなかったのではないか。聞き取りではなく、読み取りになってしまうのではないか。

→児童の意欲を上げたくて、手紙を見せたかった。また、児童の実態として、１回目ですぐに聞いて答えるのは難しいので、段階を踏んで2回目に聞き取ることとした。

△黒板に貼った絵カードの貼り方について。特に分類されていたわけではなさそうだった。児童のヒントにするなら、カテゴ

リー別にまとめて掲示するとよかったのではないか。
→「クイズ渕江小」の内容確認で、話の順番通りに上から貼っていった。確かに最後はうまく貼れなかった。カテゴリー別での掲示もよかったかもしれない。

やり取りにおける中間指導について

◎表現を考える上で、効果的だった。みんなでよく考えていた。どう言えばいいんだろう、という疑問をみんなで共有していた。今後の自力解決につながっていくと思った。児童同士で高め合っていた。
◎教師が型にはめて教えるのではなく、児童が自由に意見を言える雰囲気で、みんなで考えていた。やり取りのステップアップが見えた。
△児童の良い点をどのように伝えたのか。児童の質問を考えるばかりではなく、教師からよかったところをもっと伝えてもよかったのではないか。
→疑問の解決を、指名して児童に答えてもらうことでほめていた。しかし、もっと児童の発言を拾ってほめられたらよかった。発言を拾う技術、拾う工夫の必要性を感じた。

〈指導・講評〉

直山　木綿子先生より

・今年度、何度か奥田先生の授業を見てきたが、教室、児童の変容に驚いた。
・児童がとても頑張った。児童のやり取り、中間指導では、児童自身がよく話し、紡ぎ出したということがよく表れていた。

「クイズ渕江小」について

・教科書の登場人物（架空の人物）を児童とつなぐのは教師の作業。しかし、児童が知っている先生が教材であれば、児童はとても興味をもつ。とてもよかった。
・動画を見た後の内容確認では、児童と一緒に、児童との掛け合いで確かめていた。上手に児童から答えを引き出していた。とてもよかった。
・内容確認では、一切、日本語を挟んでいなかった。授業では、なるべく英語で話すのが望ましい。しかし、児童の実態に合わせた英語で行うことが大切。そのためには、教師が既習表現をきちんと把握していることが重要である。

絵カードの掲示について

・児童に使わせたい表現を児童との掛け合いで出させ、絵カードを黒板に掲示していた。貼り方に工夫は必要だが、形容詞だけではなく、対象物である名詞も一緒に掲示していたことはよかった。形容詞を常に対象物とつなげながら指導していたのがよかった。
対象物を思い描きながら言葉を覚える。イメージすると言葉が入る。➡イメージすることが大事。
・絵カードの掲示の仕方については、授業の流れとしては、今回のやり方でよかったが、後で整理して掲示し直してもよかった。

やり取りにおける中間指導について

・「英語を言わない限り失敗しない。けれど、使えるようにはならない」TRY and ERROR　児童が体現していた。
たくさん間違えた表現の英語、不確かな英語を話していたが、何度も相手を替えて話すこと、聞くことで、正しい言い方に気付くことができる。
・「児童は児童から学ぶ」「同僚性」ということが、中間指導によく表れていた。とてもよかった。
➡「児童が児童から学ぶ学級経営を」
「わからないことをみんなの前で言える学級」 お互いの間違いから学び合える学級づくりを。
・中間指導は、このような学級経営に支えられたものだった。

マリアさんからの手紙を聞き取る場面について

・先に手紙を見せずに聞かせてワークシートを書かせてから、次に手紙を見せるという順でもよかった。しかし、今回の順にしたのは、児童の負担感を和らげるため。今回は、みんなで読んで、なんとなく内容がわかって安心感をもってから、個別でワークシートに取り組む形だった。
どちらの順がよいかは、児童の実態に合わせて考える。

ワークシート5について

・児童が各自イメージして、言葉を選んで書いていたことがよかった。
児童が、「どのような内容を、どのような表現を使って話したらよいかを自分で考える」これが、小学校の外国語の授業における思考の場面である。